

パン氏の書評に反論する

米川明彦

本誌第一四四集における、F・C・パン氏の拙著『手話言語の記述的研究』に対する書評は、以下に述べるように、事実誤認・読み誤り・見当ちがいなどに満ちていて、書評の名に値しないものである。そのような「書評」は黙殺すべきかもしれないが、私の名譽にもかかわるし、一般読者の誤解も招きかねないので、あえて反論を記す。

「書評」の第一は、

「手話」に指文字も含めると本書の論がすべて矛盾あるいは変な結論につながる。

という。私が書いたかぎかつこつきの「手話」とは拙著二ページに記した通り、世間一般で使っている「手話」をさしていったものである。拙著の術語の「手話言語」や「手話単語」とは別のものである。だからこそわざわざ本文には「先」、「手話」としたのである。パン氏は出発点から大きな誤りを犯している。これは全く文脈や用語・表記記号を無視あるいは不用意に読み飛ばしていることによる。としか考えられない。

「書評」の第二は、

日本の手話の歴史は明治以前にないというなら、明治以前にろう者達はコミュニケーションの手段をもっていなかったことになる。こういう考えは危険であり、おかしい。

という。これは拙著のどこにも書いていないことであり、読み誤りである。拙著四四ページでとりあげたのは日本におけるろう教育の

「手話」であって、明治以前の過去の時代における「手話」ではない。このことは前後の文脈から明白である。明治以前にろう者のコミュニケーションの手段がなかったなどとは書いてもないし、またそんなばかげた考えももっているはずもない。ろう者のコミュニケーションの手段として身振りがあつたことはだれでも容易に想像がつく。しかし、それが体系をもつた「手話言語」と言えるかどうかはなほ疑問である。また、パン氏は明治以前にも「手話」が日本にあつたはずだと言うが、あつたことを証明しないでそのようなことを言うのは独断である。

「書評」の第三は、

音素と手話因子を同じレベルとして扱っている。

という。これも拙著に書いてないことで、どこからそんな解釈が出てくるのか不思議である。手話因子は手話単語を構成する要素の側面をさしたものであり、音素と同じレベルではない(拙著九二ページ参照)。

「書評」の第四は、

ストキーの *dear, tab, sig* をそれぞれ手の形、手の位置、手の運動と訳したのは間違いであり、手の運動は手が身体に当たる可能な部分をさす。

という。私はストキーの右の語を訳したなどとは言っていない。事実誤認である。また、「手の位置」とは手話単語が形成される位置をさし、身体に手が当たる場合と当たらない場合がある。(行くは身体に手が当たらない、体の前の空間を動く手話単語である。パン氏が両手だけで成り立ち、空間を必要としないという手話単語(結婚)は、空間がなければ意味がないのである。

「書評」の第五は、

手話素は手話因子の代表になっている。

という。これは右に指摘したように、パン氏が手話因子を全く誤解している。「誤りに誤りを重ねた」評言になっている。手話素が手話因子の代表でないことは拙著九二ページや九六ページを読めば明白である。

「書評」の第六は、

手話因子の制約は手話単語を孤立的にとりあげただけの発想であり、実質上無意味である。

という。これは手話単語の造語形成と、手話単語のいくつかから成る発語文(句)との区別を無視した発言である。手話単語の文中における変容に見られる制約と、手話単語の造語に見られる制約とは区別して扱うのは当然である。

「書評」の第七は、

手の位置因子に見られる制約にも数々の間違いと言い過ぎがある。手の位置は後頭部・腹部・足特に股部などいろいろあるのに気がついていない。

という。手の位置因子の制約に間違いがあるといいながら、それをあげずに手の位置の種類のことをいっている。しかし、その指摘がまた誤りである。手の位置の手話素の種類は拙著九六ページから九八ページに書いてある。パン氏があげた鯨は後頭部ではなく上頭部とすべきであり、腹部は拙著のリスト(九八ページ)にあげてあるから、読みが足りないと言わざるをえない。また、股部の手話単語は既存の文献を参照しても見当たらない。典拠を明示して教示願いたい。

「書評」の第八は、

上記のような間違いと誤認、言い過ぎがこの本ではあまりに多過ぎる。

という。このことばはそのままパン氏の「書評」に返さなければならぬ。

「書評」の第九は、

造語に働く制約は音声学の認識不足による造り話。

という。パン氏は手話言語を音声言語と全く平行的に考えているために、音声学の発想で手話言語を見ておかしいと言う。この考えのほうがよほどおかしい。手話言語の構成要素の同時性を全く無視した考えである。

以上、まとめると、パン氏は拙著を冷静によく読んでおらず、事実誤認が多い。見当ちがいの評言も多く、書いてないことを書いてあるといったり、書いてあることを書いてないといったりさえしている。さらにその文章表記にも数々の誤りがある。誤字・脱字・意味不明語・仮名遣いの誤り・符号の誤りなど、わずかに六ページに二十か所近くの誤りがある。校正ミスというにはあまりにも疎漏な文章表記である。

内輪ぼめや当たらずさわらずの書評はつまらないが、後進の誤りを厳しく指摘するかのように見えながら、内実は事実誤認・読み誤り・見当ちがいの、これは暴言としか思えない書評も困りものである。労多くして益少いと聞く書評自体に、著者側は謝すべきかもしれないが、一刀両断、むやみに切られてはたまらない。真に後進に教えるというのならばもつと冷静慎重に批評していただきたいものである。

—— 梅花女子大学講師 ——

(昭和六十一年八月六日 受理)